

史片 123

神戸大学六甲台校舎と朝鮮人

堀内 稔

六甲山から見る阪神間の夜景は、戦前の阪神間の電気料金を合計すると 100 万ドルだったことから「100 万ドルの夜景」として有名であるが、この夜景は神戸大学の経済学部、経営学部、法学部がある六甲台あたりからも楽しむことができる。ということは、六甲台はちょっとした高台になっているわけで、ここはその昔、お城があった場所として伝えられている。

お城の主は、播磨の名族赤松則村（円心）。1333 年大塔宮護良親王の令旨を受けて兵を挙げ、北条幕府の京都六波羅探題の軍と戦ったとされる人物である。城の存在は、大塔宮護良親王が大山寺（垂水区）の僧兵に宛てた令旨に、赤松城に加担するようにと記された文献で確認できるが、その位置については疑問とされていた。しかし明治 41 年にある人が、現神戸大学の敷地の雑草の中に、建物の遺構や石垣の後が散在するのを見つけ、これを赤松城の跡と発表してから強いて反対するものがなく現在に至っているといわれる。ついでに、赤松則村の城は摩耶山にもあったとされるがその位置については所説あるそうだ。もちろん、摩耶山から見る夜景も素晴らしい。

神戸大学は、1902 年に設立された神戸高等商業学校がその発祥とされ、1920 年代の高等教育機関拡張の流れの中で 1929 年から神戸商業大学となった。この大学への昇格にあたり校地の移転が計画され、それまでの葺合（現神戸市立葺合高校）から六甲台に移ることになった。この六甲台の校舎建設工事に、多くの朝鮮人労働者が従事したことが当時の新聞記事から分かる。

工事がいつから始まったのか、手元の資料でははつきりしないが、建物は現在の六甲台本館（1932 年）、社会科学系図書館（1933 年）、兼松記念館・講堂（1935 年）の順に完成し、移転が完了した 1935 年に新学舎竣工式が行われた。現在これらの建物は登録有形文化財に登録されている。

この建築工事に朝鮮人労働者が関係した新聞記事は、集め得た範囲で次の 4 つ。

①「朝鮮人土工が不穏の喊声/支払わぬ請負業者の住居を襲はんとす」『大阪朝日』1930.8.26
神戸版

②「月光降り注ぐ中で鮮人土工の大乱闘/瀕死二名、重傷十数名を出す/昨夜商大工事場で」

『神戸新聞』1930.9.7

③「危険な商大工事場/土工また圧死」『大阪朝日』1930.10.2 神戸版

④「鮮人土工を取締つてほしい/附近住民から苦情/商大工事に従う三百人」『神戸又新日報』1932.1.26

全体の人数が分かるのが④で、30 年の工事当初からかどうかは分からぬが、約 300 人の朝鮮人労働者がこの工事に従事していた。この記事で彼らの生活の一端を次のように描写している。

「(朝鮮人労働者) 約 300 名は何れも同所に露營に等しい住居をもち生活をつづけているが、生活の窮屈と労働の強化から思想的にも道徳的にもすこぶる先鋭化し、再三刃物三昧の乱闘事件を惹起する」

記事全体では、こうした喧嘩のほか婦女を脅かすなど行為を取り締まってほしいと要望する投書が所轄の葺合署に「山積」したため、請負業者である大林組の責任者を呼んで警告したとの内容である。

工事の請負が大林組であったことがこの記事から分かるが、その下にいくつもの下請け、孫請けがあったことをうかがわせるのが①の記事である。六甲八幡の請負業者宮本某が、賃金を支払わないのに激昂した朝鮮人労働者 70 名が宮本某の住居に殺到しようとして警官隊に鎮圧されたとの内容である。この宮本某はかなり悪質だったようで、料亭での遊興費の不払いや詐欺などの容疑でも取調べ中だという。

喧嘩の記事は②の 1 件だけだが、④の記事で見たように何度も喧嘩騒ぎがあったと推測される。②の内容は宮本組（先の宮本某の組か）と石田組の朝鮮人労働者合わせて 40 数名が、石塊や棍棒を振り回しての大乱闘を演じたというもの。喧嘩の原因は酒を飲んだ上でのささいなことだったようだ。

1930 年の段階では敷地ならし工事が行われていたといえる。この工事は非常な危険を伴うもので、同年 9 月 29 日に土砂崩壊のために金未迷（31）が圧死を遂げたのに続き、翌 30 日にも高田組の申敬一（48）が突然崩壊した土砂の下敷きとなって即死した。同工事の事故で見つけた記事はこの③だけだが、事故は他にもあったかもしれない。

1930 年代の初めといえば、世界的な不況のさなかである。こうした時代に危険できつい労働に従事せざるを得なかった朝鮮人労働者。神戸大学六甲台の有形文化財の建物を見る時、こうした労働者がいたことに思いをはせてもいいのではなかろうか。